

計測技術を切り口に 新たなマーケットの開拓が急務

松 島 徹
(株式会社マツシマメジャテック)
代表取締役会長



会社沿革

当社は終戦の翌年1946年に祖父・松島秀雄によって創業されました。造語・メカトロニクスの生みの親である(株)安川電機様で「ミスター合理化」と言われた機械技術者だったと伝え聞いております。機械技術で世の中の合理化のお役に立ちたいと「松島機械研究所」を起業したことが始まりです。

第一号商品は当時の花形産業の炭鉱で使用される石炭のレベル計測器でした。その商品のコア技術を元に幾多の商品群が開発され、地元・安川電機様のお陰で日本国内はもとより、遠く海外まで鉄鋼・セメント・電機・発電所など多くの基幹産業に幅広く納入させて頂くことが出来、今日の基礎が出来上がりました。

下請けから独立メーカーへ

当初は安川電機様からのご注文が殆どでありましたが、製造・開発商品が多岐に渡る中、安川電機様の代理店様から直接のお引き合い・ご注文を頂けるようになりました。

この変化こそが当社がメーカーとして独立する大きな転機となりました。下請けとしての機器製造では無く、独立したメーカーとして販売からメンテナンス、クレーム処理まで行い、営業・開発・製造体制を築き「松島ブランド」を貫いたことが最も重要なことと考えています。

営業から開発、設計から部品の製造を含む工場と、品質管理やメンテナンス・サービス部門も一人数役を兼ねる兼業体制で臨んだのは過去の話です。後にISOの導入により各部門が機能と品質を担う体制を目指しておりますが、その確立は未だ道半ばです。

営業のスタート

自社で商品の販売をするとなると、商品説明のカタログを始め、取扱説明書など販促の為の数々の資料が必要になります。何よりお客様に商品をご理解頂く為の説明要員である営業体制の整備が急務でした。まずは代理店様の営業活動を支援する為に技術サポート部隊として1963年に創業者自ら東京に移住したことが後の発展に大きく貢献する事になりました。自社の商品は自分達で責任を持ってメンテナンスする社風はこの時期に作られました。

また、広く当社を知って頂く為に、展示会への出展は当時の重要なプロモーション活動でした。1961年に東京国際見本市に初めて出展したのを皮切りに、続く1962年には大阪での見本市にも出展を重ねていきました。併せて1969年には第1回目の全国代理店会の開催もなされました。

国内から海外へ

創業者の松島秀雄は1961年に初の欧米視察旅行に参りました。訪問先のアメリカ企業から現在の当社社是「The Actual is Limited. The Possible is Immense」（現実には限界があるが、可能性は無限である）を持ち帰ったことは有名です。これを期に度々欧米を視察し、1970年にメルボルンで開催された展示会へ初の出展がなされました。現在でもこの当時の精神は脈々と受け継がれ、韓国・台湾を中心に海外代理店も増え直接輸出の割合は全体売上の30%程に成長しています。

商品とマーケットの変遷

機械技術からスタートした会社ではありますが、お客様からのご要望を形にする内に現在、以下のような商品群が出来上がりました。

1. レベル計測機器
2. ベルト・コンベアー保護機器
3. ダスト検出機器
4. 制御機器

また、これらの商品は時代の流れと共に機械技術から電機・エレクトロニクス技術に変わり、現在ではCPUを搭載する機器が主力となって参りました。中でも2002年から5年の歳月を掛けて完成させたマイクロ波（5.8GHz）レベル計は、国産初の開発が認められ、2009年に北九州市より「オンリーワン企業」（第一回）の認定を頂きました。このマイクロ波技術の自社開発がその後市場開拓に大きく影響し、様々な業種へ参入出来る大きな転換点になりました。マイクロ波以前の商品は機械的に鉄鉱石・石灰石などの素材型原料を計測することが主な市場でしたが、マイクロ波レベル計開発以降は小麦を始めとする食品原料から、半導体原料、電池原料の製造プロセスに関わる計測へと用途を拡大させて頂けるまでになりました。

近年では国交省の防災対策機器認定も頂き、河川のレベル計測を始め沿岸の潮位計測までご使用頂いています。他方、粉そのモノを計測可能なセンサー（ダイスト・モニタ）も唯一の国産品として完成し、環境測定から微細な粉塵の流失検知まで行えるセンサーとして新たな挑戦も始まっています。

機械技術を研究する会社「松島機械研究所」から、計測技術を切り口にお客様の問題解決をする会社に変遷した結果、2014年に社名を「マツシマメジャテック」に変更いたしました。

これから目指すモノ

製造現場を始め、人に寄り添い、生活の中で便利に安全な活動の為に何が出来るのか？我々マツシマメジャテックが目指すモノは、「より便利に」「より安全な生活」の道具造りへと目指して行きたいと考えています。